

Dec. 5, 1976

新しい人間についての説教

I. 新しい人間についての説教の必要と、その問題について

第2部に置いて私は、新しい人間についての説教の七つの局面を拓くべく試みる。私の叙述に何か悟るところがあった人に、私は提案したい。個々に論及している一連の主題をここに留め、仲間と共に更に論じてくだされば、どんなによいことであろうか。

私どもは、「みこころが行われますように」と祈ります。すなわち、今度語る説教においても、神のみこころが行われるように、と祈るのです。願い求める祈りには、「今はどうなっているのか」という問いも含まれています。それはまた、「聖書のいかなる言葉が、今、この時にかたられるべきなのか」、「われわれの説教が、その言葉を語るべき方が、今日、そして明日に、われわれを通じて、何を上げようとしておられるか」という問いでもあります。

「時が満ちて、神は、そのみ子を遣わされました」。それは、私どもが新しい人間になるためであります。それ以来、このふたつのもの、〈時〉と〈言葉〉とが、互いが互いに深く従属するようになりました。それ故に、霊は、聖書のそれぞれの言葉に、それぞれに異なった時代に、声を与え、あるいは沈黙させるということをされるのであります。そのようにして、三十年戦争の間、またその戦後、エレミヤの哀歌が発言しましたし、〔ヒットラーが率いる〕褐色の偶像礼拝がドイツを襲ったとき、〔スイスの説教者〕ヴァアルター・リュティは、預言者ダニエルの説教をしました。〕そして、戦争が終わったとき、ネヘミヤについて語られたのであります。ホロコーストの後には、教会とイスラエルの結びつきが主題となりました。だが、今は、何が問題になっているのでしょうか。

19世紀のゼールゾルゲの教師 — ニツチュ(C.E.Nitzsch)やアーケリス(E.Chr.Achelis)は、オルトトミー(正しく伝えること)という概念を特に取り上げ、それを、テモテへの手紙Ⅱ第2章15節との結びつきで、〈み言葉をひとりひとりに伝えること〉をいみするとしました。それからのち、歴史の歩みにふさわしく、聖書の言葉を正しく分割し、それを分配することが、正しく行われるようになりました。

み言葉に目を注ぐということは、従って、時に目を注ぐということを意味します。時を持たないみ言葉はなく、時に時としての然るべき意味を与えるみ言葉を必要としない〈時〉はありません。カルヴァンは、自己認識と神認識とが深く関わることを明らかにしました。同

じように、み言葉の理解と時の理解とは密接に関わるのであります。そして、このみ言葉と時との相互関係を明らかにすることは、自己認識と神認識との関係を明らかにするよりも困難であろうと想います。丁寧な論究を必要とし、それ自体でひとつの主題になります。私はゲアハルト・フォン・ラートの、「正しい時についての教え」、「神によるさまざまな時の定め」（『イスラエルにおける知恵』1970年、182ページ以下、337ページ以下）を参照したいと思いますが、後は、ただいくつかの示唆を与えることで満足したいと思います。「何事にも時がある」（コヘレトの言葉第3章1節）のであり、「時宜にかなって語られる言葉は、銀の器に盛られた金のりんご」であります（箴言第25章11節）。テキストを問うということは、また、時を問うということでもあります。テキストを読み解くことと、時を読み解くことは、互いに切り離すことができません。

時を理解するということは、時が示す黙視文学的なしるしに注目するということだけではありません（マタイによる福音書第16章3節参照）。そうではなくて、私どもが救いに近づいたことを発見するということ（ローマの信徒への手紙第13章11節）。黙視文学的なしるし、そして救いがダイナミックに接近しているということ、このふたつのことが、また説教テキストの選択の道を定めます。

テキストの選択

意味深い言葉があります。「決定するのは私ではない」。アナ・ブランディアーナの詩は、そのように始まります。この詩は「父」と題されています。そして、私の理解が正しいとすれば、その詩の中核にあるものを言い表しております。

決定するのは私ではない

原子が砂になり

砂が小石になり

その小石が文字に変わる

文字が芽生え、蕾をつける

言葉こそ収穫

言葉がけものとなり、抱擁しあい

子どもを生む

「収穫」とか「けものが抱擁して子どもを生む」とかいう隠喩（メタファー）のなかで語られているのは、詩を作る創造的な過程のことです。詩の最後に、最初の行がもう一度現れます。私の理解するところでは、この言葉こそ聖書テキスト選択の道に光を与えるのであります。

決定するのは私ではない

どんなときにも、そうではない

わたしが、懐胎される言葉を見るとき

父が誰であるかを、私は悟る

（「天使の収穫」1994年、11ページ）

けものが生むことについての決定は、言うまでもなくブランディーナそのひとです。だが、それにもかかわらず、この〈父〉のパスペテクィヴにおいては — これこそ、説教テキストの選択に当てはまることではありますが — 「決定するのは私ではない」ということが当てはまります。ここで、ひとつの言葉の懐胎を「見る」ということが、とても大切な役割を果たしております。

^{ドイツの実践神学者}
ヴォルフガング・トゥリルハースは、かつて、説教テキストの〈選択〉などには、できるだけ関わらない方がよいという勧告をいたしました（ルードルフ・ポーレン『説教学』第6版、1989年、119ページ参照）。それ以来、説教はまことに簡単に〈時を失ったもの〉となりました。私が思いますのに、バルトの弟子たちの説教に対して1968年以来声が高まった非難は、このトゥリルハースの、致命的勧告のおかげであります。この勧告が致命的だというのは、言葉から時を奪い、預言を語ろうという熱意を冷めさせているからです。そこでは、カルヴァンが、acomodatio Dei という言葉を用いて教えてくれたこと、そしてまた、バルトが神の人間性についての講演で語り、刑務所で語った説教において実践して見せてくれたことをも、無視することです。バルトは、その説教学において、聖書と並べて新聞を置くことを勧めておりますが、そうすれば、どのようなテキストが今語り出すべきであるかもまた、明らかになるのであります。

つまり、今、いかなる言葉のために、いかなる時が告げられているかということです。今の時はいかなるときなのでしょう。今の時を示すふたつの引用をしてみます。テオ・デ・ポアは、エマーヌエル・レヴィナスの文学に注を施し、こう言いました。「人間が、自分自身だけで既に現在を生きており、全く自由に、自分自身との同一化をはかり得る主体であるとすれば、そのような人間は死んでいる」（『エマーヌエル・レヴィナス・他の人間のヒューマニズム』、1989年、119ページ）。

ある現代という時代の^{ある}考察者が、最近、こんなことを言いました。「われわれは、自分たちが悪魔を目指して何もかもやれることは実験してみようとしている。世界とはその実験のすべてである。われわれは、まるでそう言いたいかのように」生きている。そう言うのです（ペーター・スロターダイク『自分でする試み』、刊行年不詳、本の表紙の言葉、また、14ページにある次の言葉を参照。「世界とは、われわれが、破滅に至るまで実験するすべてのことである」）。まさにこのようなことが可能になるのは、キリスト者たちの群が眠り込み、教会のいびきだけが聞こえるときだけです。私どもが今日恐れなければならないのは、われわれがやってのける実験の結果、地獄がそこで解き放たれるような世界が生まれるということです。そしてひとりの哲学者が「全く自由に、自分自身との同一化をはかり得る主体」の死を示すとき、それは、説教者たちが、目をこすり、このことに気づくべき時が来ているということです。すなわち、われわれの説教から新しい人間が出現しなければなりません。これは、救いの歴史における必然を示す「ねばならない」であります。新しい人間、これこそ、来るべき日曜日のための神のみこころであります。

それ故に、今なすべき正しいことは、新しい人間についての歌を歌い始めることです。そして、今説教されなくなっている聖書という楽譜のすべてを開示し、そこで教会員が共に歌い、共に演奏し、歌い、また楽器を奏でるところで、新しくなるのです。そこで、演奏されるもの、それはアンティ・メルヒエン、言ってみれば、現実となるメルヒエンです。「昔、こんなことがありました」という決まり文句で始まるのではなく、「やがてこんなことが起こるし、あなたは既にそこにいる」という言葉を決まり文句とするメルヒエンです。新しい人間んげんというのは、メルヒエンのように新しい存在として生きています。私どもが、私ども自身に驚き始めるならば、どんなによいことでしょうか。私どもは、自分が幾分か知っているつもりになっているような人間ではありません。自分が体験的に知ってきたような人間で

はないのです。私どもは、別の存在です。これまで説教されることのなかった聖書という総譜は、私どもをすべて別の存在のなかへと連れ込んでくれます。このアンチ・メルヒエンを物語り、そこで私どもの役割を演じるために必要なのは、ふたつの前提です。ひとつは、創造の世界への洞察であり、また、新しい世界観であります。

創造の世界への洞察

私どもが、この楽譜を演じるのに準備不足なのは、^{科学的}学問的な人間論が、人間をドラマティックな人間でなくしてしまったからです。^{科学}学問的な人間が、人間の存在が永遠の選びのなかにあること、時間のなかに造られたこと、完成をもたらす方のなかにこそ将来をもっていることを、すべて抑圧してしまったので、^{科学}学問は、人間存在の最初と最後の場面を削除してしまいました。しかし、このふたつの場面、歴史に先立つ場面と、歴史のあとの場面こそ、人間というドラマを決定するものなのであります。^{創造}^{終末}

あなたの目は、私のすべての日々を見ておられた
あなたの書に、すべての日々が記されている
私の日々は、既に書き記され、形づくられていた
その一日といえども、存在していなかったときに (詩編第 139 篇 16 節)

あなたは御計らいに従ってわたしを導き
後には栄光のうちにわたしを取られるであろう (詩編第 3 篇 24 節)

私どもキリスト者も、一 半ば意識し、半ば無意識に 一 無神論的な人間像を養っているものであります。それは、人間の根源と目的を無視しています。そして、〔人間がそれにかたどって造られたはずの〕神の姿について何も知りません。その結果、知覚に欠けが生じ、その欠陥が、人間の自意識に刻まれてしまっております 一 神学者もまた人間であります。それ故に、^{科学}学問が、まだ視野に入れていないものを、創造のわざに、人間に知覚することこそ、説教者にとってふさわしいのであります。
ほろべきこと。

世界を新しく知覚するに至るのに、どのようにしたらよいか

新しいものを発見するのは愛であります。愛は、目を見えなくするようなものではありません。目に見えないものを知覚するまなざしを得るようと目を開かせます。観察者は、ただ見たところを記録するだけなのに、愛する者は、驚きの目を見張ります。自分が見た者が、自分と共に歩み、これまで無関心のままに判断してきたのとは異なった判断をするようにさせます。聖書にある驚くべきひとつのテキストに — つまり、コリントの信徒への手紙Ⅱ第5章14-17節ですが — パウロは、他者の愛が私どもの目を開いてくれるということを書いています。私が自分で自由に訳してみます。「キリストの愛がわたしたちを愛してくださっているので、わたしたちは、ひとりの人の死から、すべての人は死んだのだとの結論を出すことができます」。使徒が出した結論は、哲学者が出す結論と同じです。ただ、使徒がその根拠としたのは、哲学者のそれとは全く違います。そこで大切なのは、時代考察にもよらず、法典によるのでもなく、究めることのできないほどの愛から生まれる結論であり、決定な結論であり、判断の発見でありました。「クリサンテス・トート」とある通りであります。この判断においては、意志と表象とはひとつであります。すべての人は死にました。死んでいるのです。しかし、死体特有の硬直のなかで死んでいるではありません。「すべての人のために死んでくださった」ということが反復されるところで、将来が無理にでも入り込んでくるのであり、それが、死の硬直を緩めてくれるのです。あの方がすべての人のために死んでくださいました。「そのようにして、今生きている者が、もはや自分のために生きるのではなく、自分たちのために死んでくださり、また甦らされた方のためにいきるようになるためです」。こうして生まれる結論は、一種の説教学的な中心命題であります。それはまた、拡大してすべてのキリスト者が作る共同体としての現実存在にとって大切な教えとすることができます。「こうして、生きている人びとは、今から後、誰をも肉に従^つて知ることはなくなるのです」。

キリストの愛の支配するところ、十字架において私どもを愛してくださるキリストを抽象化してしまうような知覚は存在しなくなります。キリストの受難が、私の判断を自由に操るようにならざるを得ません。私の意志に対しても、表象に対しても同じであります。— 救いの歴史における必然を示す助動詞がここにあります！ こうして、キリストが自分のためにしてくださったこと共に、初めて具体的な存在となります。こうして、愛のまなざしが、人

間を〈新しさ〉なかに無理にでも押し込みます。「こうして、誰でもキリストのなかにあるならば、そのひとは新しく造られたものなのです。古いものは過ぎ去りました。新しくなったのです」。新しい人間についての説教の前提になるのは、新しい人間を見るまなざしであります。

よく注意して見ておきたいと思います。キリストの愛に迫られている者として、使徒は新しい創造について語っているのです。愛に衝き動かされる者は、愛の言葉を語ります。愛に生きる者は新しい名を発明します。愛の手紙は、業務上の手紙とは違ったスタイルで書かれます。おそらく私どもの説教は、あまりにも、業務上の手紙に似ているのです。

新しい人間について語るということが、説教されるべきであるのに説かれることのなかった聖書の箇所があるということと結びついてしまったのは、おそらくまた、雅歌が沈黙したままであったことにもよると思います。聖書の釈義家たちが、雅歌の口を封じてしまいました。シナゴグにせよ、教父たちにせよ、雅歌が世俗的な恋の歌であったことは知っていたと思います。もっともうるわしい人間感情を表現する言葉が、この人びとにとっては、これからそうなるはずであり、また既にそうなっているものを作るメルヒェンの国を発見し、歌うためには、それで既にじゅうぶんであったのです。

私は、ここで、この新しいものの持ついくつかの局面をいささか明らかにしてみたいと思います。皆さんが、そのそこここに、今まさに世に出ようとしている、既に懐胎されてる言葉を見出してくださるとよいがと、望みながらであります。

II. 新しい人間の七つの局面

1. 日々のための日常のパンではなく

新しい人間は栄養を必要とします。その栄養は耳を通じて入ってきます。あるノルウェーの童話はひとりの王女の話をしてします。王女は、継母にじめられ、ろくに食事も与えられません。娘は空腹のままに、牛の世話をしなければなりません。とうとう、青い牡牛が、自分の左の耳に小さな布があると言いました。それを取り出し、広げてみると、好きなだけの食べ物、飲み物が手に入りました。こうして、この娘カリは、「たちまち、力に溢れ、肥えて

きて、血色もよく、また肌も白くなりました。そのために、妃も、がりがりに痩せていた娘たちも、嫉妬のあまり、青くなったり、黄色くなったりしました」。

父ブルームハルトは、「痩せこけたキリストの教会」について語っておりますが、そうすれば、耳の中の小さな布きれの場面を、次の日曜日に語ってくださってもよいと思います！私がここで、メルヒエンを語ってみようと努力しているのは、私どもが、新約聖書のリアリズムを色褪せ、擦り切れたものにしてしまっているからであります。使徒が自分を、子どもをその胸に抱き、あやしている乳母か母親にたとえておりますが（テサロニケの信徒への手紙Ⅰ第2章7節）、それもまた、青い牡牛の物語に負けないほどメルヒエン的^{語り口}なやり方です。乳母や母親は、自分から出るものを与えます。その乳を与えるのです。そして使徒は、次の節で、一種の平行文章の形で、こう説明します。「そのように、わたしたちは、あなたがたをこころからいとおしく思っているので、ただ神の福音にあずからせるだけではなく、自分たちの魂にまであずからせたいと、こころから願っています。あなたがたが、それほどに、わたしたちにとって、愛すべきものとなったからです」（第2章8節）。福音の伝達に不可欠のものとなっているのが、魂の伝達なのであります。魂の伝達とは人間の魂そのものです。

新しい人間を説教するということは、〈ひとのために生きる現実存在(Proexistenz)〉、つまり、献身することによってのみ可能となります。このメルヒエンにおいても、雄弁に語られている献身であります。牡牛は王女を養い育てるのに成功し、怪物と三度も戦った後で、救い出した王女に小さな刀を渡します。自分の頭を切り離し、皮をはいでもらいたいと言うのです。「これだけが、牡牛が得たいと思った、ただひとつの感謝のしるしでありました」。このメルヒエンが、ここで語っているのは、使徒と同じ言葉であります。おそらく、新しい人間が、説教されることのない^{まきの}聖書箇所についての説教 説教者自身の犠牲を求められている。

のひとつになってしまっているのは、その説教をすると、完全な犠牲を求められるからであります。カルヴァンは、このテサロニケの信徒への手紙Ⅰ第2章7節について、こう注をつけました。「ほんものの牧会者に数え入れられたいと思う者は、このパウロの思いを鮮やかに^{体現しなければなりません。}に現さなければなりません。そのような人にとっては、教会の救いのほうが、自分のいのちよりも大切なものになるのです」。自分のいのちを与える者だけが、ひとのいのちを養うことができるのです。

し 説教者 説教者の云々

2. 乳児食と完璧なご馳走

メルヒェンにおける魔法の食卓と異なり、説教者は、食事作りの名人です。説教における神のみこころを問う問い、正しい時における正しい言葉を問う問い、オルトノミーを問う問いは、その中に、区別することができる賜物、教会共同体の霊についてなされる判断を含んでおります。この判断が、食事プランについても判断をくださいます。パウロが、コリントの教会の人びとに、彼らとは、「霊の人に対するように語る事ができず、肉の人、つまり、キリストとの関係では乳飲み子である人々に対するように」語るよりほかなかったと書いたとき、そのような判断をくださるのをためらわなかったのです。そこで、「乳と固い食物」とを区別しているのです（コリントの信徒への手紙Ⅰ第3章1-3節、なおヘブライ人への手紙第5章11-14節参照）。

「誰をも肉に従って知ることはない」ということは、ただ目が見えないと言うことと取り違えてはなりません。むしろ、教会の霊的現実にたいするまなざしを得ていることを前提しております。注意していただきたいと思いますが、固い食物と対立するのは、水っぽいスープというわけではありません。そうではなくて、「乳」です。基礎的な栄養を与えるものです。子どもを養い育てるのに必要な栄養をすべて含んでいます。乳、そして固い食物のいずれにおいても、完全な栄養を与える手段であるということが大切なのです。

現代の説教に対する私の考察からすれば、説教は、教会員に、必要なカロリーを与えることができておりません。変わるのは栄養の内容ではありません。その提供の方法です。サービスです。提供の仕方が、教会員の状況に即して変わらなければならないのです。「賢い説教者は、自分の語り口を、自分の説教の聞き手の理解の能力に合わせなければならない。何も知らない人びとの場合には、初歩的な説き明かしから始め、それからようやくゆっくりと先に進めることになる。しかし、最初の説き明かしは、いささか強くなった人びとのためになされる包括的な教えと同じように、もっとも重要なものを既に含んでいるのである」（カルヴァン）。理解の能力に適應するということを語るということは、教会共同体のなかにある霊を検証するということを前提にしています。まさしく判別の賜物が前提されるのです。そこで必要なのは、兄弟姉妹との対話をたくさんすることです。— そして、何よりも神と語ることです。「確かな判断力と知識を持つように、わたしを教えてください」（詩

編第119篇6節)。

この祈願が必要なのは、自分が霊の判別という課題に直面していることを知る説教者が、さまざまな局面で誘惑にさらされるからです。判別をくださる者は、自分自身を忘れ、そのために^思重い高ぶる危険にさらされています。そうすると、聞き手の理解能力を軽視し、あるいは、聞き手の理解能力について独断的なドグマを作り出し、それによると、たとえば、十字架の言葉が、今日の聞き手によって理解されるということは、もはや期待できないと言うのです。そのような説教者にとっては、教会員の現在の状況、また自分が思いこんだままにする教会の状況の体験が、律法になっています。そうすると、説教者は教会員の可能性をもはや認めず、キリストの将来のなかにある教会共同体の将来を抑圧してしまっているのです。

われわれの〔ヨーロッパの教会の〕伝統のおかげで、教会共同体を臨床医のようなまなざしで見ることができなくなっています。私どもは、教会の全体を見ることができず、個人を孤立させて見ているのです。修道院が生まれて以来、そして、何よりも敬虔派が生まれてからというもの、一種の区別が行われるようになり、教会共同体が、ふたつの階級に分裂させてしまっております。宗教的人物、完全な人間である修道士は、民衆から自分を区別し、他方、他方〔敬虔派の代表的な説教者である〕ホーフアッカーの説教は、集まっている会衆を、既に新しく生まれている者と、まだ新しく生まれていない者とに、分けてしまっているのです。

敬虔派の説教は、あまりに早くアーメンを言い過ぎます。悔い改めと新しく生まれるということは、終点ではありません。そうではなくて、始まりであります。新しく生まれるというのは、個人的な行為ではありますが、教会共同体は、全体として、成熟しているのか、未熟であるのか、霊的であるのか、まだ肉であるのかが、問われます。新しい人間は、大きな全体のなかに生きる人間です。教会共同体のコミュニケーションの過程のなかにある人間なのです。最後の局面を論じるところで、またこのことに戻ってみましょう。

3. この世の憎しみについて

〔メルヒェンの主人公であった〕カリ・ホルツロックは、継母に憎まれています。新しい人間についての説教が、説教されないままの聖書箇所の説教になってしまっているのは、私ど

も自身が、新しい人間に対して、継母みたいにふるまうからです。それは、私どもが、自分にとって未知の新しいものよりも、良くて古いものを好むからです。そのために、新しい者が、新しい人間から現れると、そこに憎しみが爆発します。「あなたがたは、あらゆる人に憎まれる」（マタイによる福音書第24章9節、ルカによる福音書第21章17節）。「しかし、人々は、わたしの名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる」（ヨハネによる福音書第15章21節）。必ずそうだと言うわけではありませんが、これが通常の状態になってしまうことがあります。「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである」（マタイによる福音書第5章11節）。

得意になって

新しい人間が現れる姿は、群衆のなかで水浴びをする政治家のような姿を取ることは決してありません。むしろ、第3帝国においてダビデの星をつけさせられていたユダヤ人、あるいは、売春を強制された韓国婦人に似ています。新しい人間は、既に逃亡途中の幼子のようなものです（マタイによる福音書第2章13-15節）。また、すべての者のために死なれた方の代わりに、ベツレヘムにおいて死ななければならなかった幼子たちのようなものです。その方の使徒は、キリストの苦しみの欠けたところを、満たさなければなりません（コロサイの信徒への手紙第1章24節）。そして、祭壇の下で殺される殉教者たちに示唆されることは、彼らが、「自分たちと同じように殺されようとしている兄弟であり、仲間の僕である者たちの数が満ちるまで」なお待つようにということでありました（ヨハネの黙示録第6章11節）。

物理学が自殺的になってしまい、また、「われわれが、世界と共に、悪魔を目指して何もかもやれることは実験してみようとしている」時代にあつて、必要なのは、殉教の将来を指し示すことであります。アンティオキアのイグナチオスが、ローマに旅して、そこで殉教の死を遂げようとしたとき、こう書きました。「今、私は、ようやく弟子であることを始めます」（イグナチオのローマの教会への手紙第5章3節）。

21にも見える落字は、十分に殉教に備えよ。

4. 自己憎悪

福音書のふたつの箇所、イエスは、明瞭に自分の魂（いのち）を憎むことについて語られました。それが弟子であること、ないしは、永遠のいのちに至る前提であります。「もし、だれかがわたしのもとに来るとしても、……自分のいのち（魂）であろうとも、これを憎ま

ないなら、わたしの弟子ではあり得ない」(ルカによる福音書第14章26節)。「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」(ヨハネによる福音書第12章25節)。イエスは、このような言葉をもって、私どもが通例用いているところの値打ちをひっくりかえしておしまいになりました。これを、メルヒエンに託して明らかにすることは、私には、ほとんど不可能です。

新しくなるプロセスにおいて、人間は、自分が罪の支配のもとにあることを体験する限り、自分自身を憎むようになります。「……なぜならば、わたしは、自分の望むことは実行せず、かえって憎むことをするからです。……なぜならば、わたしは、自分の望む善ではなく、望まない悪を行っているからです」(ローマの信徒への手紙第7章15節、19節)。新しい人間が成長するのは、古い人間に飽きたらないときです、そして、罪の力に抵抗する者となるのです。自分が、そのなかで生きている矛盾に対抗しようとして、その意志がたかぶります。抵抗すれば傷つきます。ヤコブは足をひきずり、また、ダビデはよく知っておりました。「しかし、神の求めるいけにえは打ち砕かれた霊。打ち砕かれる悔いる心を、神よ、あなたは侮られません」(詩編第51篇19節)。打ち砕かれた魂は、自分を完全に立て直すことはありません。砕かれた魂は、再建することができないままです。—そして、そのまなざしを、惨めな者に注いでいる方に頼るように勧められます。その方は、自分の内面が癒し得ないことを苦しみ、そのところは砕かれ、打ち砕かれた思いに生きている者たちの傍らにいてくださるのです(詩編第34篇19節、イザヤ書第57章15節、第61章1節)。

「自分自身だけで既に現在を生きており、全く自由に、自分自身との同一化をはかり得る主体」の死体浄化を試みる者は、もちろん、私どもを説得し、人間は、楽しむこともできるし、働いて業績も擧げることのできるものであって、健康ではないかと、語りかけます。ドストエフスキーの〔『カラマーゾフの兄弟』に登場する〕「大審問官」は、キリストが、究極的自由の苦悩をもたらそうとするのに、教会は、人間のしあわせだけを欲しているが故に、キリストを火刑に処そうとします(ルードルフ・ポーレン『預言と牧会』、1982年、102ページ以下参照)。

5. なお見出されないままに、見えないものを望み

牡牛と共に無事に逃げる事ができたカリは、豚小屋に入って木の皮の衣装を身につけます。それから、洗い場に立ちます。また、王子に体を洗う水、手拭いや櫛を渡すとき、あえて自分を隠して低くさせられます。しかし、カリは、本当は、自分が誰であるかを知っています。新しい人間は、自分が誰であるかを、まだ知りません。ですから、新しい人間に、それを言わなければなりません。もう新しくされていることを、王の位置にまで高められていることを、はっきり見せてあげなければなりません。それ故に、新しい人間に必要なのは、福音の説教です。その説教が、新しい人間が持つ王としての尊厳、イエスと共に、墓から出て明らかになった〔いのちの〕尊厳を得ていることを、確かなこととするのです。

聖書が、キリスト者はなお隠されたままでいることを明瞭に語っているところで（コロサイの信徒への手紙第3章1-4節）、聖書が語るのは、今既にそうになっており、これからそうなるにちがいないことであります。「あなたがたは、キリストと共に復活させられている」。あなたがたは、もはやあなたがた自身のところには留まってははいない。あなたがたは復活の出来事のなかに引きずり込まれている。今なすべきことは、メルヒエンに似たことが、現実であることを明らかにすること。なぜならば、（ドイツ福音主義教会賛美歌第85番の第8節が歌うように）「ここでは、あの方が、その墓から出て来られたということを、完全には告げられてはいなかった」のです。なお私どもの肉体は地上的なものです。死に服したままで。私どもは、新しい人間としては、ただ断片的に生きていただけです。全体的な存在に向かう途上にあります。そこでは、自分になるということではなく、自分とは別のものになりつつあるのです。深みにではなく、高みに至るのです。「上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座についておられます」（コロサイの信徒への手紙第3章1節）。

ここで言う「求める」とは、具体的にどのようなことか、と、釈義家たちの意見を聞けば、途方に暮れるばかりです。」。ハインリヒ・グレーフェンに聞くと、この動詞は、哲学の授業に用いられる専門用語だそうです（キッテル新約聖書神学辞典、第Ⅱ巻、897ページ）。信仰がここにひとつの類比を見る目を持つのであれば、エドゥアルト・シュヴァイツァーが、否定的な仕方での類比を、愛との間に試みています。しかし、雅歌第3章1節には、まさに、「求める」とは、どういうことかを鮮やかに示されております。— 70人訳も、同じ言葉を用いております。

夜ごと、ふしどに恋い慕う人を求めても
求めても、みつかりません。

ふしど — それは憧れの生まれる場所、夜 — それは、夢見る時です。

どうかあの方が、その口のくちづけをもって
わたしにくちづけしてくださるように。

第1章1節

人間が地上にあって体験するもっともうわしいもの、それは、天にある喜びを味わわせるには、十分に足りるのです。その喜びが、私どもをいっさいの束縛から解き放ちます。「上にあるものを、神の右に座しておられる方を、求めなさい」。それに直ちに続けて、使徒は、二重に重なる言葉を続けます。「天にあるものにころを留め、地上にあるものにころを留めてはならない」。使徒が示すのは、方向です。新しい人間は、公開されて生きる必要はありません。天の公の世界に生きています。テレビに出るわけでもなく、写真が出るわけでもありません。「なぜならば、あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです」。しかし、隠されたままに留まることはありません。それ故に、教会共同体も、見えないままに留まってはいません。そうではなくて、折りに触れて集まり、完全な食事によって養われます。そして、遂に隠れていたところから出てくる時にまで至るのです。「あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう」。

6. 衣替え

カリは、木の衣を着て洗い場に立ちました。しかし、日曜日になると、ひとつの岩壁が開かれ、カリは、銅と、銀と、遂には金の衣装を得ます。それを着て、馬に乗って教会堂に^{行き}登ります。そこで、あの王子が彼女を恋するようになり、メルヒエンならば、必ずそうならなければならないことになっている結末、— メルヒエンらしい結婚式に至るのです。信仰において、信仰を通じて、人間は自分の定め通りのものになり、新しいステイタスに達するのです。そこでは、ちょうどメルヒエンのなかで語られるのと同じように語られます。「あなたがた

は皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです」（ガラテヤの信徒への手紙第2章26節）。そして、この無意味に見えることが、洗礼において、意味深いものとなります。「なぜならば、洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです」（第3章27節）。この言葉は、（ヨーロッパに生きる私どもにとっては）幼児洗礼によって埋め尽くされてしまった思い出を改めて思い起こさせる言葉として、ここで語られるのです。

ハンス・ディター・ベッツは、この「着る」という言い方は、伝承に基づくと言い、こう書いています。「いずれにせよ、推測できることは、洗礼の儀式の然るべき場所で、洗礼を受ける者たちに、あなたがたは、今や神の子の身分が与えられた、と告げられたのである」

（『ガラテヤの信徒への手紙注解』、1988年、329ページ）。われわれキリスト者は、今日、まさに、この私ども^{子たる}の身分の意識を失ってしまいました。それだけますます必要になっているのは、新しい人間の自我を強める説教です。私どもが神のまなざしのなかで身につける衣服は、銅や、銀や、金の糸によるものではありません。み子がそれを織ってくださいました。十字架を担ってくださったとき、織ってくださいました。〔官憲の〕僕たちが、織るのを手伝いました。僕たちは、イエスの着ているものをはぎ、茨を頭に押しつけて、愚かな王に仕立て上げました。唾を吐きかけ、棒で頭を打ちました。私どもを^覆い包む衣服、それは、イエスの叫びによって織りなされています。イエスのドラマが私どもを包んでいます。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」（「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」）。

私どもが着る衣服、それが私どものフィーリングまで変えてしまいます。しっかりと立ったカラーをつけ、ネクタイを締め、黒い服を着ている人は、着物を着ている人とは異なった気分を感じているでしょう。そして、説教が課題とするのは、洗礼を受けた者が、キリストの衣服を着るのを手伝うことです。新しい生活感情を伝えてあげるのです。そこでは、説教者は、人間が王の衣服を着るのを手伝う宮殿の部屋付きの僕です。

7. 複数の新しい存在

どの男にせよ、女にせよ、洗礼を受けるときは、ひとりです。それぞれ、ひとりずつ受けるのです。しかし、洗礼の水が、いっさいの民族的、社会的、性的な特質を押し流してしまいます。「あなたがたは皆、キリストにおいて、（ひとつ）だからです」。光をかざして、よ

く見ると、洗礼は、革命的行為です。フランス革命が語った〈平等〉は、作り出されるものなのです。〈私〉が〈私たち〉となります。「ひとつの霊によって、わたしたちは、洗礼によって、すべて、ただひとつのからだに受け入れられたのです……」（コリントの信徒への手紙Ⅰ第12章13節）。エルンスト・ケーゼンマンが、こう言っているのは正しいと思います。「これは、もはや隠喩による語り方とは言えないのである」（『パウロのさまざまなパースペクティヴ』、1969年、181ページ）。それは、しかし、新しい人間が自分自身から出て、キリストのなかに受け入れられるということです。自我が、他者のなかへともぐりこませてもらうのです。かつてあったものは、もはや存在しません。単数から複数へととなりました。この複数の存在において、天のキリストが此岸的な存在となられるのです。「……すべての者が、ひとつの霊を飲まされた（エポティステーメン）」（第12章13節）。シュラッターは、このエポティステーメンを、聖餐に関係があるとしました。キュンメルは、洗礼に関係があるとしています。この動詞は、「注ぐ、水増しにする」という意味でも用いられます。おそらくそれは、第3章9節にあります「神の畑」の余韻を残しているのかもしれませんが。「すべての者が、ひとつの霊を飲まされた」。これもまた、想起の文章として語られています。コリントの人びとにとって、洗礼は、霊を受けるといふことと、関連しているのです。

衣替えの助けによって入手するのは、それを着る男も女も、〈私たち〉に変えてしまう衣装です。「なぜならば、洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです」（ガラテヤの信徒への手紙第3章27節）。この新しい衣装がもたらすのは〈平等〉です。民族的、社会的、性的差別のいっさいが、もはや受け入れられなくなりました。

「なぜならば、洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです」（第3章27節）。人間の隔てが取り払われました。ユダヤ人、ギリシア人の隔てもなくなりました。奴隷制が廃止されました。「社会的不平等の排除」が宣伝されています（ベツ）。この不平等排除は、常に新しく告げられなければなりません。ひとつであることが、常に開かれ、戦い取られなければなりません。そのようなわけで、聖餐もまた、他の教会と同じように、コリントでも危うくなっていた、ひとつであることを目指して祝われたのです。完全を目指す途上にあつて、私は、他の人びとと共に養われます。「それ故に、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを食べるからです」（コリントの信徒への手紙Ⅰ第10章17節）。聖餐もまたひとつであることのために役立つのです。

新しくあることのためにも

「イエスは、ご自身の死を通じて、教会共同体を創造し、また、その主となっていてくださる。そして、イエスは、ご自身の霊を通じて、教会共同体のなかで、ご自身の死が力を発揮するようにしておられるので、主の食卓もまた、教会共同体を、ひとつのからだにするのである」(シュラッター)。まさにこのことこそ起こらなければなりません。これは、自動的に起こることではありません。そのために必要なのは、霊を求める祈り、エピクレシスであります。また、教会員への勧告です。しかし、ただ単にエピクレシスや勧告ではなく、霊そのものが来てくださることが大切なのです。なぜかと言えば、ただ霊において、霊を通じてのみ、個人が、全体に組み込まれるのです。そのようにしてのみ、「聖餐は、自分の個人的な生き方の終焉となり、自己中心の欲望の断念となり、自分の意志をキリストの意志に完全に委ねることとなり、自分の行動が、自分と共に結ばれている人びとの生活に組み入れられることとなるのである」(A.シュラッター『神の使者パウロ』、第2版、1956年、297ページ以下)。 — そして、これこそ、新しい人間が作る兄弟の交わりであります。しかし、これは、ひとりでに生まれるものではありません。

そうなると、私どもの聖餐執行をめぐって、私どもは、不安、心配を抱かざるを得なくなるのではないのでしょうか。 sacramentは、完全に向かう前進のしるしとなります。私どもは、自分たちが行っているリタージュに満足しています。そこで、新しい響きを与えようとしても、事柄は少しもよくなりません。しかし、カルヴァンにとりましては、たくさんの穀粒から出来ている聖餐のパンは、「ひとつを他から分離することは出来ない」という勧告を意味するものとなりました(『聖餐小論』、1541年、学生用全集、第I巻の2、461ページ)。ひとりひとりの死んでいた主体が、生きた複数に拡大される媒介となるのは、友情です。共に食事をするということなのです。こうして、そこに、他のエゴ、他者の〈私〉の友人となります。(わたし)が〈私たち〉となるのです。

今日の教会共同体が必要とするのは、み言葉に仕える者たち相互の間における友情であります。男女いずれの牧師にとっても、まさに必要なのは、分裂してしまっている教会の望みなき状況に対する戦いであります。なぜならば、み言葉を宣べ伝える者の力は、宣べ伝える者たちの友情に他ならないからです(ルードルフ・ボーレン「教会の一致と分裂 — 教会の説教の力と無力」、E.ブエス記念論文集『バシレイア』、1993年、37ページ以下所収)。

私どもが、人間学において、人間からそのドラマティックな性格を奪ってしまった用に、

教会論においては、実際に、教会を狭いものにしてしまいました。それ故に、最後に私が発言を求めたいのは、ギリシャ正教会の^{狭さを破るために}声であります。その手引きによって、— ヘブライ人への手紙第12章22節が語るような意味において — 日曜日ごとの集まりを、目に見えるものを超えて^{知覚}近づくことができるようになるのであります。ゲオルギ・フロロフスキは、こう書いています。「オイカリスティアにおいて、目に見えないが、^{聖餐}現実に明らかにされるのは、教会の豊かさである。どのようなレイトウルギアも、全教会との結びつきにおいて遂行される。いわば、全教会の名によって行われる。ただ、(祭壇の)前に立つ民の名においてだけではない。(……) なぜならば、どんな(小さな教会)も、全教会の一部というのではなく、全教会の姿を集中的に示すのである。全教会の一致と豊かさから切り離されてはいないのである。従って、いかなるレイトウルギアにも、神秘的ではあるが、現実のこととして、全教会が共に現在化している。そして、そのレイトウルギアにあずかっているのである。レイトウルギアの祝いは、ある程度までは、常に自己を新しく^{して}起こる、神の受肉なのである」。— 私は、この「ある程度まで」と書いてくれていることに感謝します。なぜならば、永続する受肉について語ることは、「時が満ちたとき、神は、み子を遣わされた」ということに矛盾してしまうからです。— 「そして、このレイトウルギアのなかで、われわれは、神の人が教会の基礎を据えた方、かしらであることを見、— そして、この方と共に、全教会を見るのである。オイカリスティアの祈りにおいて教会は、自分自身を、ただひとつの、完全なキリストのからだとして見、また認識するのである」(『オイカリスティア』、14ページ。D.F.フェルミ『現代の正教会の神学』、1990年、150ページ)。

説教は学習し得るのか

見ること聞くこと
↳ 物事に注意深く

よく聞く人はよく語る (御二七のみのみならず、交りの中をも)
良い模範に聞くこと